



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
©1987  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## キリストとは何者か

### キリストシリーズ ①

「あなたたちは私をだれだと思  
うのか。(マテオ16・15)」

これからしばらくの間、信仰  
とキリスト教的な生活にとって

何よりも重要なテーマ、すなわちイエズス・キリストについて考えてゆこうと思ひます。まず、私たちにも冒頭に掲げた質問が向けられていることに注目してみましょう。およそ二千年前、主がペトロと弟子たちに投げかけられた質問です。この御生涯のうちの決定的な瞬間に居合わせたマテオの筆を借りるなら次のようになります。「フィリッポのカイザリア地方に來られたイエズスは、弟子たちに『人々は人の子をだれだと言っているのか』と聞かれた。弟子たちは『ある人は洗者ヨハネと言ひ、ある人はエリヤ、またある人はエシミアあるいは預言者の一人だと言ひています』と答えた。するとイエズスは『ところで、あなたたちは私を

だれだと思ふのか』とおおせられた。(マテオ16・13・15)

ペトロの率直で熱情あふれる答えは、私たちも知っている通りです。

「あなたはキリスト、生ける神の子です。(同16・16) 私たちもこのように、はっきりとした言葉で答えることができるでしょう。抽象的な言ひ回しでなく、御父からの恩寵の裏(同16・17参照)である生きた経験が放つ言葉で。一人ひとり、個人的に、この問いに答えなければなりません。『あなたを私をだれだと思ふのか。私について人々が話すのを聞いたあなたに答えて欲しい。あなたにとって、私はいったい何者なのか。』ペトロが受けた天啓と、信仰に満ちた返答とは、長らくイエズスのおそば近く従ひ、師の語られるのを聞きながら、その生涯と使命をつぶさに見てきた結果です。(同16・21(24参照))

私たちが、イエズス・キリストへの信仰を今以上にはっきりしたものにするためには、ペトロにならって注意深く、心をこめて師に聞き入らなければなりません。キリストの証人であり、私たちの先生でもある十二使徒の根本にならなければなら

ないので。同時に、二千年の長きにわたる経験と証明を受け入れる必要があるのでしよう。それは、キリストの問いかけに対し、あらゆる時、あらゆる所で、無数の信者が声をあ

わせて答えてきた歴史です。今日、「主であり生命の与え主」なる聖霊に促されつつキリストの王国の門口へと歩みを進める私たちは、新たな喜びをもって神に答えるよう求められています。神が靈感をお与えになり、そして私たちに期待なさる答えとは、私たちが自らの歴史のうちに再びイエズス・キリストを迎え入れることなのです。

### 円熟した答え

2 私を誰だと思ふのか。このイエズスの問いには、教育的な賢明さを感じられます。軽率な答えには信を置かず、じっくりと時間をかけて祈り、考え抜いたすえの答えをお望みだということです。教会が告白し、実践してきたキリストへの信仰に、注意深く、しっかりと耳を傾けなければなりません。

実際、イエズスという存在については、いかに理にかなった価値あるものであろうとも、単なる人間的な共感を寄せるだけでは充分ではないのです。同じく、歴史、神学、靈性あるいは社会学上の興味のみからイエズスについて考えるという態度も片手落ちと言えましよう。キリストに關しては、キリスト者の間でさえ、無知、悲しむべき誤解、あるいは全くの不信が影を落としている有様です。「イエズスの福音」についても、いろいろなきことが取り沙汰されていま

す。それでいて、福音の偉大さや、全てを包み込むその広大な本質は見落とされがち。自らが告白する信仰に従った生活をしようともせず、福音を論じることもしばしばです。福音を尺度にする気概のない人、キリストの良き道具となるつもりのない人、またキリストの超自然的な神性を否定する人、あるいは歴史の中に生きたキリストの人性を忘れ去った人がいる。なおその上に、キリストの生涯と教えを貫く十字架上の犠牲という重要事を忘れ、この世でのキリストの「秘跡」として造られた教

会の役割を無視して、ついには完全無欠なキリストのメッセージを歪曲するに至る。このような人々がなんと多いことでしょう。

こういった事態の中で、私たちはイエズスへの真の理解を深めよと駆り立てられています。世紀を経て御父は、かつてのペトロの場合のように、聖霊の御働きによって、イエズスに關するあまたの天啓を人々の心にお示しになりました。こうして信仰の証人たちは殉教に至り、敬虔な学者たちは、信仰に照らされた知性を使ってイエズスという神秘を探り求め、とりわけ教会の教導職は、聖霊の賜に導かれてイエズス・キリストに關する信仰簡条を定めてきたのです。

イエズスとは、本当に何者なのか。答えを見出そうとはやる私たちの心は、確信がなく、不安げに探し求める福音書の登場人物の姿そのものです。「ある夜イエズスのところへ」尋ねに來たニコデモ(ヨハネ3・2参照)、そして「イエズスを見よう」と木によじ登ったザケオ(ルカ19・4参照)、全ての人が、イエズスを見つめるための手助けがしたい。また、病人を癒し、罪人を救ひに來られた御方(マルコ2・17参照)を人々に知らせたいとの熱意にかられて、私はこの仕事、すなわち、教会の構成員と全ての善意の人々にイエズスの姿を示すという重大な課題に取りかかりました。

皆さんは、私が教皇座についた時、「キリストに扉を開こう」と呼びかけたことを憶えていらっしやるでしょう。その後、第四回シノドスに出席

された司教方の考えをまとめた『要理教育に関する使徒的勧告』のなかで次のように述べました。「要理教育の本質的かつ第一の対象は、(…)『キリストの秘義』である。要理教育を施すということは、ある意味で、誰かにこの秘義をあらゆる面から探させることである。(…)キリスト自身において実現された神の永遠の計画を、そのキリストにおいて明らかにすることである。(…)キリストだけが私たちを聖霊において父の愛に導き、至聖三位の生活に与らせることができる」と。(5番)

今回のシリーズでは、次の四つの問題を中心に考えたいと思います。

- (1) 歴史上の実在人物であるイエズスと、超越的なメシア、アブラハムの子、人の子、神の子であるイエズス。
- (2) 福音書によれば、御父との深い交わりの中で、聖霊に鼓舞されていた真の神、真の人であるイエズス。
- (3) 教会の目から見たイエズス。教会は、聖霊の助けを借りて啓示について調べ、啓示を解明し、特に公会議においてキリストに関する信仰の正確な定義を下した。
- (4) 御生活とみわざから見たイエズス。廣い受難と栄光におけるイエズス。私たち人間のあいだにおられるイエズス。世の終わりまで(マテオ28・20参照)御自分の教会と世界の歴史のなかに在すイエズス。

**真のカテケシスとは**

**3** 教会が神の民にイエズスについてのカテケシスを施すときのやり方は、本当に種々様々です。しかし、いずれを選ぶにせよ、真のカテケシスとなるためには、聖書と聖伝という永遠の泉から教えの身を汲み上げなければなりません。教父や教会博士たちの解釈、典礼、人々の信仰と敬虔、すなわち、教会の生き生きとした、活力に満ちた聖伝に則って、教えなければならぬということです。教会は聖霊の御働きの下にあります。主が約束してくださったように、聖霊は「あらゆる真理に導かれるであろう。自ら語るのではなく、聞いたことを語って未来のことを示されるであろう」(ヨハネ16・13)から。

教会の聖伝は、公会議の教えの中に明確な形で表わされ、統合されています。信仰宣言の中にまとめられ、信仰をもって啓示を究めた神学研究と教会の教導職によって、深められてきました。

真実性と完全性を欠くなら、イエズスに関するカテケシスは何の役に立つでしょうか。教会は、真正かつ完璧な見方でイエズスの秘義について考え、祈り、宣言してきました。一方、教わる側の条件や必要をいかに考慮するか、という問題に関しては、教育上の賢明さが必要になります。先に引用した『要理教育に関する使徒的勧告』で述べたように、「すべての要理教師は、教会の中で果たす役割のいかんを問わず、自分の授業と態度によって、イエズスの教えと生活を伝えるよう努めねばならない」(6番)からです。

**4** 序論というべきこの考察を終えるにあたり、イエズスが投げかけたもう一つの問い、刺し通すように鋭い、逃れえない問いを思い起こしましょう。イエズスに従う弟子たちの前に十字架が恐ろしい姿を現わし、大勢が離れ去った時、イエズスは残った弟子たちにお尋ねになりました。「あなたたちも去っていきたくはないか」と。ここでも代表として答えるのはペトロです。「主よ、だれのところに行きましょうか。あなたは永遠の生命のことばを有しておられます。私たちは、あなたが神の聖なる御方であることを知っていますし、信じています」(ヨハネ6・66)

# 死に抗しよう

**1** 「上のことを求めよ」(コロサ13・1)

主の御復活を祝う荘厳な典礼。そして、死からよみがえった御方の力を独自の仕方で体験した使徒パウロの言葉。「あなたたちがキリストとともによみがえったのなら上のことを求めよ」(…)地上のことではなく上のことを慕え」(…)あなたたちの命は神の中に隠されているからである」(同3・15)

**2** 復活祭のメッセージは、証言です。

空の墓を見た人々が、証人です。よみがえった御方に出会った人々が証言します。

「私たちが目で見たこと」、不信のトマが主に触れたように「ながめて手で触れたこと」(ヨハネ11・1)を「私たちは……告げる」(同1・3)「この命は現われた、私たちはそれを証明する」(同1・2)その命は現われました。何もかもが死の闇にのみこまれたかに見えた、その時に。

**3** 復活祭のメッセージは、証言です。

キリストは、私たちのためにこの世にくんだり、私たちのために十字架の死を耐え忍び、死を通して私たちに命を取り戻してくださいました。私たちの命は、キリストとともに神の中に隠されているのです。(コロサ13・3参照)

**4** 「今日こそ神が造られた日」(詩篇118・24)

この日は、何度もこの真理を証言します。神は、人間の手による死には甘んじておられません。それを証明するために、キリストはよみがえられました。

十字架上で息絶え、墓に納められたキリストが、まさにその事実を証言しています。神は決して死に屈服なさらない。

「神は死者の神ではなく生者の神」(マテオ22・32)なのですから。

人々が大きな石を墓の前にころがし、封印をしたその時に、命は再び目に見えるものとなりました。

復活祭のメッセージは、証言であると同時に挑戦です。

キリストは、私たちのためにこの世にくんだり、私たちのために十字架の死を耐え忍び、死を通して私たちに命を取り戻してくださいました。私たちの命は、キリストとともに神の中に隠されているのです。(コロサ13・3参照)

**3** 復活祭のメッセージは、証言です。

キリストは、私たちのためにこの世にくんだり、私たちのために十字架の死を耐え忍び、死を通して私たちに命を取り戻してくださいました。私たちの命は、キリストとともに神の中に隠されているのです。(コロサ13・3参照)

**4** 「今日こそ神が造られた日」(詩篇118・24)

この日は、何度もこの真理を証言します。神は、人間の手による死には甘んじておられません。それを証明するために、キリストはよみがえられました。

十字架上で息絶え、墓に納められたキリストが、まさにその事実を証言しています。神は決して死に屈服なさらない。

「神は死者の神ではなく生者の神」(マテオ22・32)なのですから。

69)と。

この一連の考察によって、私たちがイエズスの問いかけに答えられるようもっとよく準備し、正しい答えを返すことができようように。そして力の限りを尽くして、キリストと生活を共にすることができようように。(一九八七・一・七)

キリストは死を退けました。キリストは自らの死によって、死を征服なさったのです。神が調えられた日。

今日こそ、神の偉大な立ち上がり(復活)の日。

**5** 人間は、死に屈してしまうのでしょうか。

それとも、神の復活に与ることができるのでしょうか。

地上のものだけを望み、求めるとき、人間は死に屈します。

地上のものは、自分では「不死のパン種」を持っていないから。そうです。悲しいかな、人間は死から逃れられないばかりか、死を押しつけざるを得ません。

人間は、何度となく他人に死を負わせます。時には何も知らぬ人、無実の人、まだ生まれていない者たちまで。(…)

**6** 今日こそ、私たちのために、主が調えられた日。

大いなる証言と、挑戦の日。

人間の絶えざる問いかけに、神が



**すすめ**

十字架の道行(定価一〇〇〇円 二千〇〇円)

●写真14葉、黙想のしおり70点を含む

# 説教・講話・書簡等の抄訳

## 和睦する神

大いなる返答をなさる日。

人間と、人間の起源と行き先、存在の意味と次元についての問いかけに。

「私たちの過ぎ越しの小羊であるキリストは、すでにいけにえとなられた。(コリント①5・7)

過ぎ越し、すなわち通り過ぎること。人類の歴史の中を、神が通り過ぎて行かれる。

避け難い人類の死のさだめを、最初から最後まで通り抜けること。そして、終着点は、永遠。

人類の罪の歴史を通り抜け、死を身に負い、神のもとにある生命に至る。私たちも、何度も死から立ち上がり、キリストと共に、神の内に隠

された「命をめざしたいものです。準備はできていますか。

それは「私たちの」命でもあるのですから。

十字架にかけられ、上げられたキリストの内にある、この命の充足をめざして進むつもりがありますか。

7 キリストは歴史上の一時点で復活なさいましたが、なおも無数の男女の生活の中で、一人ひとりの、また民族の歴史の中で、復活する日をお待ちされています。

この復活には人間の、すべての人の協力が必要なのです。その内部には、二千年前、墓を吹き飛ばしてよみがえった同じ生命が、つねに脈々

と流れながらも。(…)

誰であれ信仰と愛と苦しみの内に死ぬ人には、最後の勝利を称えるキリストの復活が訪れます。

8 神が人間として最後に発せられた言葉は、死ではなく命でした。絶望ではなく、希望のことばだったので。

この希望に向かって、今日も教会は人々を招きます。

教会は繰り返して、信じ難いが事実であることを宣言します。キリストは復活なさいました。

全世界がキリストと共に復活しますように。アレルヤノ  
(一九八六年の復活祭)

息子の一人ひとりを迎え入れてくださいます。ただし、再びキリストにおいて生まれ変わり、新しい者となるならば。

実に、御父はキリストにおいて、私たちに独り子をお与えになりました。私たち一人ひとりが(たとえ放蕩息子であったとしても)キリストによって「新しい人」となることができるように、そして、内側から新しくなった人が再び神の道に立ち返ることができるために。

3 回勅「いつくしみ深い神」の述べるところは次の通りです。

放蕩息子のたとえは単純で、しかも深い仕方です。回心の実際を表現しています。回心は、愛が働いていること、人間の世界にいつくしみがあり続けていることのもっとも具体的な表現です。いつくしみのほんとうの本来の意味はただ見ていること、どんなに深く同情をこめてであっても、倫

理の、からだの、素材となっている悪いことを、見詰めていることではなく、いつくしみがほんとうに本来の姿をもって表われるのは、世界と人間の中に実際にある悪いことから良いものを見出し、引き出し、促進するときです。このように受け取ると、いつくしみはキリストの救世のメッセージの基本をなし、キリストのわざを構成する力となっています。

キリストの弟子、あとに続く人びとは、いつくしみを同じように行なったのでした。いつくしみは、人びとの心と行動の中に姿を現わし続けました。悪に負けることなく、善をもって悪に勝つ(ローマ12・21参照)愛の特別に創造的な証明となったのでした。(『いつくしみ深い神』沢田和夫訳、カトリック中央協議会発行、第4章6番)

### 内的な変化について

4 このように、放蕩息子の話は罪人が内側から変わってゆくさまを物語っています。どのようにして昔の生き方が(かなり根強いものだったにもかかわらず)「消え去って」しまい、回心のための恩寵が働いて「新しい」人間を誕生させるのかを読みとれます。キリストは人間のために「十字架の御血によって」(コロサイ1・20参照)回心の恵みを手に入れてくださいました。こうして罪人も、キリストにおいて「新しい者」となり、神と和解 こと

「神はキリストにおいてこの世と和睦し、人々にその罪を負わされな

い」(コリント②5・19)とある通り。放蕩息子と父親の間であった出来事は、ことごとくキリストのみわざの中で成就しました。と言うより、今も成就しつつあります。人類と永遠の契約を結ばれた神は、キリストにおいて和睦した神として、自らをお示しになっているからです。このことは言わば、キリスト教の最も重要な部分となるもので、広義には、キリストにおける人間の使命(召しだし)の根本をなすものであります。

5 聖パウロのコリント人への書簡によれば、神は「私たちを御自分と和睦させる」のみならず、さらに「和睦の役目を私たちに委ねられ」ました。(コリント②5・18)

そして、神が私たちを通して勧められるのであるから、私たちはキリストの使者である。キリストによって切に願う、神と和睦してとどまれ」(同5・20)と続けています。

神との和睦。これは、神がキリストにおいて人間と和睦なされた結果であり、同時に教会にあっては救いの遺産の基本的要素となるものです。十字架と贖いのわざによる遺産。この中に罪の赦しを通して人と神とを和解させる力が秘められています。

使徒的勧告『和解と悔悛』では次のように述べました。「聖パウロは私たちの視野を広げ、キリストの御業の宇宙的な次元に目を向けさせてくれた。キリストにおいて御父は、天上のもの、地上のものを問わず、全被造物と和睦される(コロサイ1・20参照)と聖パウロは書いています。『怒りの日に、ひこばえとなり、彼によって、この世に生き残ったものが

今月の祈りと神の現存(定価九〇〇円、千二〇〇円)  
罪と告解(定価七五〇円、千三〇〇円)  
信徒 ■ 神学と霊性(定価四〇〇円、千一七〇円)

# 不変の教え

あった(シラ44・17)とあるように、まさしくキリストは贖い主であり、『私たちの平和』(エフエゾ2・14)、和解のみなものである。

「聖体の秘跡のもとに繰り返されるキリストの受難と死は、典礼上、(和解のいけにえ)と呼ばれているが、実に理にかなったことである。すなわち、神との、そして兄弟との和解。なぜなら、イエズスは、供え物をするより先に兄弟と和睦すべきことを説いておられるから。(マテオ5・23参照)(…)」

**6** 「キリストによって切に願う、神と和睦してとどまれ。(コリント②5・20)」

本日、教会は全世界に向けて、心からの熱意をこめて使徒の要請を繰り返します。

さらに使徒の書簡の朗読を続けてみましょう。まことに心を打つこの言葉を、「神は罪を知らなかった御方を私たちのために罪となされた。それは、私たちがその方において神の正義とするためである。(同5・21) 神との和睦への招きは、言葉や叫びにとどまるものではありません。たとえそれが、ヨルダン川畔に立つ洗礼者聖ヨハネや旧約の預言者たちのごとく力強い叫びであろうとも。

この呼びかけは現実です。想像もつかない程の現実、御父と御子の愛の極みから生まれ出る現実なのです。それは犠牲！  
それは値！

実に私たちは高値で買われたもの。日ごと神を賛美し、そのいつくしみゆえに神に感謝しましょう。(コリント①6・20、7・23参照)(三・九)

**1** 「主よ、だれのところに行きましょう。あなたは永遠の生命のことは有しておられます。(ヨハネ6・68)」

キリストよ、私は誰のところへ行けば良いのでしょうか。  
聖金曜日ほど、私たちが御身の十字架に近づける日はありません。教会に伝えられた御身の死と復活の記念は、十字架によって確固たるものとなるのです。

十字架は御身の使命を締めくくる言葉、十字架こそ、永遠の生命を示す言葉です。天と地の間で、神と人との間で、たった一度だけ発せられた言葉。神はこの言葉を撤回なさいませんでした。今なお響きわたっています。

**2** 聖金曜日の典札のなかで、預言者イザヤは語ります。  
「実に、彼は私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担った。彼は私たちの罪のためにつきさされ、悪のために押しつぶされた(…)。(イザヤ53・4-5)」

「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのれの自分の道を歩んでいたが、主はみなを罪を、彼の上に負わせられた(…)。(同53・6)」

「そうだ、彼は生きる人の地から取り去られ、民の罪ゆえに打ち殺された(…)。(同53・8)」

**3** そう、彼です。ところで、彼とは誰のことなのでしょう。彼とは人間。この世に生まれ、死んでゆく、無数の人間のうちの一人。それにしても、ひとりの人間がすべての人の罪を一身に背負うことなどできるのでしょうか。彼とは誰なのでしょう。彼とは御父のみことば。全被造物の長子である御方です。彼によって「万物は造られた。(コロサイ1・16、ヨハネ1・3)」

彼は御子であって、御父と同じ実体を有しています。彼は造られたすべてのものを受け入れる。それゆえ御父の御前で「私たちみなを罪を自らのものとする」ことができるのです。

彼は全ての罪を一身に引きうけることができる。ただ彼のみが……。たえず重みを増してのしかかる罪の重荷。その荷で打ちひしがれた私

## 十字架の道行

たたちが神の正義にかなうため、彼の力にすぎるより外に方法があるでしょうか。

**4** ピオ十二世教皇の言を借りれば、「今世紀の罪とは、罪の感覚(意識)がなくなったこと」であります。同じ言葉は、三年前の世界代表司教会議の文書『和解と悔悛』にも用いられました。「罪の感覚を失ったこと、これが今世紀の罪である」と。人は自らの行ないを罪と呼はずに罪を犯しています。

このような態度は自由ではありません。真理を偽ることではかないのです。自由への道なら、真理を通るはず

です。十字架上でお亡くなりになった御方が仰せられたではありませんか。「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由な者とす(ヨハネ8・32)」

そのためにこそ、キリストは十字架を耐え忍んだのではなかったのですか。

十字架には、人間の罪についての究極の真理が隠されています。世の罪についての真理が。

人間がいかに否定しようとも、また、いかに罪の感覚を良心と生活から取り去るべく努力しようとも、十字架はつねに(人間の)罪の証人であり続けるのです。

**5** 「神は御独り子を与え、たもうほどこの世を愛された。それは、彼を信じる人は、世をさばくためではなく、世を救うために来た。(ヨハネ12・47参照)」

二〇世紀の人々よ、キリストの十字架という法廷から、どうか顔をそむけないで欲しい。十字架は、永遠の生命の言葉。天と地の間で、一度だけ発せられた言葉です。神と人間との間で。神は取り消しをなさいません。この言葉が消え去ることはないのです。(一九八六年の聖金曜日「十字架の道行」)

分裂した世界、往々にして互いに対立する世界に対して、教会は自身と教会の創立者への忠誠を証ししなければならぬ。教会の見地からして受け容れ難く、司牧面から見ても不毛の原因となる、第二の教導職というようなものを作ることは、万難を排して避ける義務が皆さんにはあるのだ。

☆ ☆ ☆  
みなさん方がお持ちの人間の価値のことを考えて欲しい。それらはキリスト教的な価値でもあるから。ただし、キリストの光を受けて強められたみなさんの歴史の根源を決して忘れることなく。

☆ ☆ ☆  
無慈悲な暴力をもってしては何の解決にもならない。暴力をもって助長するように入ることができない。

☆ ☆ ☆  
ペルソナ(人格)に備わった不可侵の尊厳、従って労働者すべての尊厳を認めること、これこそ、キリスト教の社会観の根本である。

☆ ☆ ☆  
ご夫婦、それに子供さんたち、聖体の秘跡とキリストへの信実の愛をもととして、みなさんの忠実と相互愛を新たにしてください。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円

一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

振替 郵便 振替 郵便 振替 郵便

3-72393